

>> 今一番売れている作家風

先日、とある介護施設の経営者と雑談を交わしていた。
彼は、コーヒーをひと口すすってから、ふとこんなことを口にした。

「最近の職員は、レクリエーションをやりたがらないんですよ。QOL の向上なんて言っても、ピンときていないみたいで。
むしろ“自立支援”という言葉だけが、変に頭にこびりついてるんです」

不満というよりは、呆れとも困惑ともつかない表情だった。

QOL——Quality of Life。生活の質。
福祉や医療の現場で頻繁に使われるこの言葉は、どこか上滑りしているようにも思えた。
本来は利用者の暮らしを豊かにすることを意味しているはずなのに、現場ではその中身が曖昧になっている。
レクリエーションは必要なのか、不要なのか。
それすら語られず、ただ「やりたくない」が先に来る。

そのとき、ふと頭をよぎった話がある。
古代エジプトの石板に刻まれていた、ある神官の嘆きの言葉だ。

——最近の若者はヒエログリフを学ぼうとしない。
——神の言葉を忘れつつある。

数千年前の社会でも、年長者は同じように若者を嘆いていたらしい。
歴史は繰り返す、とはよく言ったものだ。

だが、問題はそこではない。
若者が変わったのではなく、時代が変わったのだ。
いや、もっと言えば——「伝え方」が変わらなかったのかもしれない。

現代の若者が“自立支援”にだけ反応するのは、そこに数値化された成果があるからだだろう。
“QOL”の向上は、目に見えにくい。

そうした“成果”は、評価シートには書き込めない。

それだけのことだ。

伝え方が時代に合っていないだけなのだ。

介護の価値を、本当に伝えるために必要なのは、教え込むことではなく、“共有すること”なのだと思う。

東野圭吾のような、静かな観察とわかりやすい論理展開、淡々とした語り口を意識しました。